

回想記

『ゆたか倶楽部物語』

①クルーズと人との出会い

まつうら ちゅうお 松浦 陸夫

東洋のハワイ・八丈島

旅行会社に入社した昭和42年頃は飛行機を使った2日間の八丈島旅行(当時は東洋のハワイとビートルズされていた。)だけを一年中募集しました。当時の初任給は2万6000円で先生の初任給(長野県は2万5000円)とほぼ同じでした。入社して即、八丈島へ研修旅行。全日空の40人乗りのフレンドシップで、生まれて初めて飛行機に乗りました。(夏に帰った時には町で飛行機に乗った人は数名といわれました。)当時は航空機の事故も多く、都内でも飛行機にも乗ったことのある方は非常に少なく、ある意味仕事やりやすかった。

上司から「君は信州の田舎者だから下町の方が営業にむいている」といわれ、江戸川、葛飾、江東、足立、北区が担当エリ



八丈島

アになりました。八丈島へ研修旅行に行っただけで営業の仕方など一切教えられません。町内会長、お寺、神社、保険の外交員、旅行好きな方など聞いて回り、再度夜に行くので八丈島の風景、亜熱帯植物、牛角力、温泉、そして何より片道一時間飛行機に乗れることをアピールし、夜、お客様の指定の町内会館やお寺の本堂などで写真会をしました。幻灯機で八丈島の出発から帰りまでスライド映写し、シート一枚と大き目の画鋏と、参加者全員に差し上げる旅行カバン一個を持って説明会です。女性の方は食事の片づけが終わった後です。帰ると深夜になることも度々でした。

八丈島の空港では飛行機を降りたら飛行機をバツクに全員で記念写真、服部屋敷、名物おじさん菊地正氏の迷行事で人を沸かせる牛角力(今はやっていない)、黄八丈の染元(無形文化財山下めゆ)さんの解説、名古の展望での名物トコ天を食べ、仲屋商店でトビ魚とムロアジのクサヤを購入、宿泊は八丈温泉ホテル(今はない、当時は日本旅行が経

営)、その後八丈国際ホテルを利用するようになり、80歳を超えても元気な奥山ハツ稲田カエさんと奥山熊雄さんの八丈太鼓を宴会での余興に見ました。食事にはムロアジやトコブシ、明日葉のおしし、島寿司昔ワサビが無かったので西洋カラスを使用)などが出ました。帰りには記念に観葉植物トラノオ一本と、前日空港で撮った白黒の写真、プレゼント、全員が同じ旅行カバンを持って写る記念写真は、当時の流行でした。

旅行代金は一人1万6000円、飛行機の席は一機あたり34名の団体枠があり早めに個札席を予約すれば一機40名分でチャーターと同じになり、機内マイクも数回使ったことがあったが今では考えられないことだと思えます。初年度は15回位八丈島の添乗をしました。

八丈島は大変懐かし、今年で足掛け旅行業50年、私の旅の原点です。(今でも東海汽船の「橘丸」を利用して数回の添乗も続いています。)

2年目からはお客様のリピートです。会社の用意したパッケージコースやお客様の希望を聞いたうえでコース

す。3日目はのんびりと東名高速道路を帰りました。入社時は社員35名の旅行会社が万博景気に乗じ倍以上に増えました。そこで経営陣が考えたことは、これからは「船だ」と言うことになり、秋口よりチャーター船を使った船旅に大きく舵を切りました。

船の旅 沖縄・小笠原

「クルーズ」はまだ一般的には理解されておられませんでしたが、「船の旅」を表現に使用しました。(クルーズは平成元年から使われるようになる)これが今に続くクルーズとの出会いです。

大島運輸(現マルエーフェリー)の運航する小型客船「ふじ丸」「にっぽん丸」(3000トン)を年間10数回回チャーターしました。客船とは言っても横揺れ防止装置(フィンスタビライザー)がついているわけがなく、よく揺れました。風速10メートルの風で船酔いが始まりエチケット袋の臭いが大部屋に蔓延すると次から次へと連鎖反応でほとんどの方が酔ってしまいました。

年間250日は、ある大きな宗教団体が当時富士山の本山詣に九州、四国の会員を船で輸送する交通手段として日本旅行が全て仕切っていました。但し夏休みや年末年始、選挙の前は近畿日本ツーリストと東邦トラベルが二分し船をチャーターしました。

行き先は南九州、小笠原、ヨロン島、海外は韓国などです。船内は大部屋(平均50名位)で雑魚寝、折りたたみの卓袱台(1間×1尺半)を下駄箱の下から出している食事。朝はサンドイッチとコーヒ、昼は炒飯にお吸い物、夜はエビフライ定食など。風呂は無いので長い航海は出来ませんでした。トイレは男女合わせて30程で食後は長蛇の列でした。船内の催物は講談で当時の一龍齋貞二氏がよく乗船しました。(後年あるパーティで彼が司会をした折、昔話に花が咲きました。)

小笠原は昭和46年に初めて訪れた時には母島は無入島で、野宿をしました。(この4月には、日本の純客船として21世紀初の母島寄港を商船三井客船の「にっぽん丸」をチャーターして実施することは感慨深いものがあります。)父島入港の際小笠原支庁にトラック輸送の特別許可証をもらい、荷台にお客様を30〜40名乗せて約1時間半の観光のピストン輸送をしました。小湊は道路が開通していませんので、二見港より漁船にカヌーを1隻曳いて沖合よりカヌーに乗り換えて上陸、海水浴や中山峠の散策をいたしました。マリンスポーツがはじまる前まで釣りや海水浴が中心でした。

沖縄では南部戦跡が主であり、ひめゆりの塔、摩文仁丘の都道府県の慰霊

碑参拝(大型バスで当時は上まで登れた)参加者も60〜70歳代の戦争体験者が全てであり(戦後26年)太田実沖縄方面根拠地司令官(中将)による海軍次官への最後の打電「沖縄県民に対するの愛情と感謝その後の特段の配慮願う」のあと自殺にはガイドさんの名調子でお客様がほとんど泣きました。後日、太田氏の実子三男の落合峻(たおさ)氏旧江田島海軍兵学校、現在は第一実科学校の元校長、湾岸戦争後ベトナム海軍派遣指揮官(海将補)をされ、私が日本チャータークルーズでの「ふじ丸」をチャーターして江田島の正面玄関(校庭口が正面玄関)の沖合より通船にて上陸の際、落合さんの力により上陸ができ、船内では江田島の今昔を講演していただきました。

人との出会い

この頃会社には清水正次郎氏(胡桃沢耕史)が顧問のような形で入社しました。もともとはポルノ作家で翻訳など手がけておりましたが、11PMにレギュラーで出演したりしており、氏の先生である海音寺潮五郎氏から諫められて純文学に転向し、今までの版權を全て売り払い、お金の半分を家へ、半分を持って単車での世界一周にて構想、昭和58年「黒パン浮慮記」にて第89回直木賞を受賞しました。

私とは十数回船で一緒に、「クルー

ズのゆたか倶楽部」を創業した時には心良く会長になっていただきました。「新さくら」「おりえんとびいなす」「ふじ丸」など私のチャーターした船では7回程講演をしていただきました。つくづく人との出会いの中でいかされてきたと思っています。

さらにこの年の夏にはスワイヤー(キャセイパシフィック航空の親会社)が日本に進出し、コーラルプリンセスをチャーターして「グアムサイパン10日間の船旅」を実施することになり、まさに目からウロコなことが……。

つづく

筆者紹介

ゆたか倶楽部創設者
クルーズマスター

まつうら ちゅうお 松浦 陸夫



1970年 大学卒業後、旅行会社に入社。1984年 日本初のクルーズ専門旅行会社「ゆたか倶楽部」を創業。海外渡航163回、これまでにチャーターした日本船は、さくら丸、新さくら丸、ふじ丸、にっぽん丸、ニユーゆうとびあ、おりえんとびいなす、ぱしふいっくびいなす、飛鳥、飛鳥II、コーラルプリンセス、サンシャインふじなど約180回。代表取締役を31年務め、2015年退任。現在は取締役。